Vol.137 市史編纂だより

わがまち歴史散歩

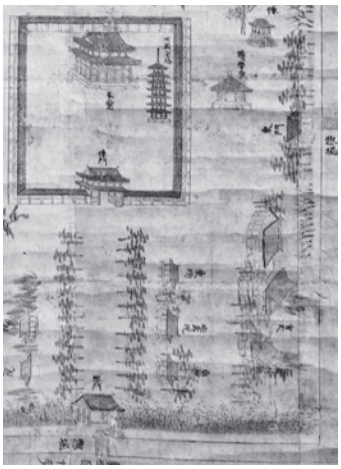
中世池田の寺院

○寺院はいつ創立されたか

地域を江戸時代の在郷町池田に限定して考えると、池田の町にはその広さの割に多くの寺院があります。いまでも歩けば、たいへんよく目につきます。池田の町の特徴と言ってもいいでしょう。

これら寺院の創設とその歴史的変遷について、『新修池田市史』の古代中世編というべき第1巻では何も記していません。

ただし、第1巻では各寺院安置の仏像について、その様式を中心に制作年代を細かく推測し、特徴をまとめています。池田における仏教文化財の記録という点では、熱がこもったいい記述です。しかし、言うまでもありませんが、これをもって当該寺院の創設期とすることはできません。平安時代などの古い仏像は後からでも入手できるからです。



▲堀に囲まれた寿命寺境内の図（部分・寿命寺蔵）

つぎに、近世編に当たる第2巻では個別的に寺院名をあげながらそれぞれの寺伝などに記載された創建の由来を紹介しています。しかし、寺伝ではどうしても古いことを良しとしますから、創建が古代にさかのぼる寺院も出てきます。当然、疑問がわいてきます。

そもそも、池田において寺院の創設に関する確実な史料というのは残されているのでしょうか。ここでは、『池田市史』史料編①古文書篇をしっかり読み直してみようと思います。

○中世寺院の記録

『池田市史』史料編①古文書篇には全部で57件の古文書が翻刻され、作成年月日順に掲載されています。その中で寺院に関する記事が含まれているのは少なく見ても18件。一つの史料に二つの寺院名が登場することもあります。

もっとも古い記録は、賀茂村（川西市）の土地を久安寺に寄進した尼浄法の寄進状で、嘉禄元年（1225）のもの。これをはじめとして13世紀には9通の土地売券や譲り状など、14世紀には6件の寄進状や軍忠状、そして15世紀から16世紀にかけては3件の文書が掲載されています。前回紹介した天正6年（1578）の兵乱などを潜り抜けて残された古文書にほかなりません。

文書の宛先は勝尾寺・久安寺、そして寿命寺の3か寺です。この3か寺は、摂津国内の各地から土地を中心にいろいろな寄進を受け、相当な財力を築き上げ、それを守るための武力（僧兵・僧徒・衆徒）を組織し、寺院内にも多数の「坊」を持っていたようです。もちろん、帰依する人や縁のある人びとに対し極楽往生など功徳を保証したものと思われます。これが中世的権威だったこと、そしてそれが天正6年荒木村重の反乱によって焼き払われたことについては前回くわしく見た通りでした。

○寿命寺の記録

地域を旧在郷町池田に限定すると、記録上もっとも古い寺院は嘉禄2年（1226）11月18日の史料に出てくる「東光寺」（場所は確定しがたいが宇保の可能性）、翌年10月12日の史料に出てくる「呉庭寺」（これも宇保）の2か寺です。ただし、中世的な権威ある寺院に成長できたかどうかは分かっていません。その後の史料が出てこないところを見ると、そうはならなかった可能性の方が大きいのではないでしょうか。

驚くのは、勝尾寺や久安寺と並んで権威ある寺院の中にまちなかの寿命寺も入っていたことでしょう。ひょっとすると、記録が残っていないというだけで、天正兵乱の時には存在していたことが確実な大広寺・本養寺・西光寺もそうだったのかもしれません。

さて、ここで考えるのですが、戦国期池田のまちというのは、世俗的権威者である池田氏、宗教的権威者であるいくつかの寺院と神社、そして経済的権威者であった商人など、質の違う自律的権威が集合した複合体だったのではないかということです。近世的な町は、これがいったん解体されて形成されていくのではないでしょうか。

（市史編纂委員会委員長・小田康徳）

◆問い合わせは生涯学習推進課市史編纂☎754・6674